

第3章「現代アメリカ」の形成における〈革新主義〉の位置づけ

前章で抽出された3つの論点から、本章では、広く合衆国の20世紀初頭にみられた〈革新主義〉の動向に焦点をあて、「現代アメリカ」¹の形成史において、それがどのように位置づけられているかを、今日のアメリカ史学研究における見解に基づいて明らかにする。ここでは3つの段階で考察する。まず、〈革新主義〉が現れた背景として、19世紀末に合衆国の人々が直面した深刻な社会的問題を検討した後、その問題解決として現れた20世紀初頭における〈革新主義〉の動向を概観する²。最後に、当該研究内の各学派及び主要論者における〈革新主義〉の解釈の諸相を検討し、「現代アメリカ」の形成における〈革新主義〉の位置づけやその性格を明らかにする。

3-1. 20世紀初頭の合衆国における社会問題

3-1-1. 社会問題の前提となるもの：「19世紀アメリカニズム」

南北戦争の後、急激な工業化と経済的自由放任主義、そして膨大なる移民たちによって、合衆国は「1890年代中葉までに機能不全に陥り、一定期間の混乱期」³を迎えることになる。一方、アメリカ史の中で、もしこのような問題が強調されるのであれば、もとより、それとは対照的な姿ともいえるべき前提があつたことであろう。

合衆国はその経緯から、民族的同一性においてその国家的起源を「想像する」ことが困難であり⁴、歴史を持たぬその国土は、しかも、西へと膨張しつづける未知なる地平であつたため、19世紀末までは国民の拠り所としての「固有の国土」とは無縁であつた⁵。つまり、西欧近代的枠組みとしての〈国民国家〉の概念をそのまま合致させることには無理がある。

そのため、しばしばアメリカを基礎付ける「アメリカの精神」の淵源には、以下2つの「ファーザーズ」がその尊敬すべき体现者として鎮座することになる。すわなち〈ピルグリム・ファーザーズ〉〔「巡礼父祖」〕と、〈ファウンディング・ファーザーズ〉〔「建国父祖」〕である⁶。彼らの精神は、自らが後にした旧世界における腐敗の「排外」を基盤として、その上に自由と平等という「革新」的な西欧近代主義と、それとは本来相容れぬはずの「保守」的なキリスト教信仰との両者の融合による「普遍的理念」とに特徴的である⁷。同じく近代市民革命を成し遂げたフランスでは厳格なる〈ライシテ〉がみられる一方で、アメリカでは、イギリス的な〈国教会制度〉の否定としての「排外」が〈政教分離〉において唱えられながらも⁸、それと同時に、非宗教的であるべき革新的な「啓蒙主義思想の中心にある基本的人権」が、「保守」的なピューリタンの思想土壌のもとで受容されることが可能であったことは着目すべき性格である⁹。たとえば、大統領就任式での聖書を用いた宣誓に象徴的なこの様子は、〈アメリカ独立宣言〉(1776)冒頭の有名な前文に、すでに明示されている¹⁰。

すべての人間は神（Creator）によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利を与えられており、その権利の中には生命、自由、幸福の追求がふくまれている。

かつてのヨーロッパの専制君主が〈王権神授説〉において個人の絶対的権勢の理論的根拠としたのに対して、先述のごとく、啓蒙思想とも結び付いた新大陸の「ピューリタンたちは、〔中略〕自分たちを、神によってその意味を実現させるよう、とくに命ぜられた人間集団」と考えた¹¹。すなわち、人類が共通して目指すべき「普遍的理念」の実現を「約束」され、その拡大を天意において託された先導的な存在との認識に至るのである。ここから歴史家のジョイス・アップルビーも述べる、かの国の「アメリカが人類史の例外であるという意識」、かの〈アメリカ例外主義〉の存在が指摘される¹²。かかる「例外」を通奏低音としながら、「普遍的理念」を信奉し、さらに〈旧世界〉のもたらした腐敗を「排外」しながら、この無垢なる「聖地」における「独立自営農民」としての彼らは、ヨーロッパを尻目に国際的に孤高を保ち、そのピューリタンの北東部の農村の民主的共同体に自らの理想の国家像を見いだしたのである。

それに加え、無限に広がると思われた魅惑の西部フロンティアが、何人も平等に「独立自営農民」として経済的自由主義を追求する可能性を提供し、また、あらゆる社会問題を解決しうる場として、それが 20 世紀を迎えるまでのアメリカ人たちの「自由」を担保するための精神的支柱となっていた。アメリカ・ナショナリズム研究の古矢旬は、この独特のナショナリズムを「アメリカニズム」と名辞したが¹³、かつて 19 世紀初頭に訪米したアレクシ・ド・トクヴィルも指摘した、このようなアメリカのイメージは¹⁴ ——「白人、アングロサクソン、プロテスタント」〔以下、WASP〕たちにとっては——、アメリカ独立革命をへて、アメリカ北東部ニューイングランド地方のみならず、合衆国内で共有されていくのである。20 世紀転換期の深刻なる社会問題が発生するその前提としての、このようなアメリカの表象を、古矢にならい、ここでは「19 世紀アメリカニズム」と呼ぶことにしたい¹⁵。

3-1-2. 経済的〈自由放任主義〉と〈新移民〉：19 世紀末の急激な工業化と都市化

作家マーク・トウェインの小説にちなみ「金メッキの時代」‘Gilded Age’の語で知られる合衆国の 19 世紀末は、南北戦争以後の 1865 年から 1890 年ごろまでを指す。トクヴィルがみた農村共同体としてのアメリカも約半世紀が経過したこの時期において、この語が示すのは、急速に発展した資本主義的商工業における「外見だけは華やかだったが内実をとまなわなかった時代」としてのアメリカであった¹⁶。

1890 年には銃鉄生産量が「世界の工場」たるイギリスを抜いて世界一にもなるように、この時代の「外見の華やかさ」を導いた経済成長の要因には、広大な国土における豊富な資源、西部フロンティアへの鉄道敷設事業や、それとともに拡大する巨大市場があり、さらに対外政策においても、北軍勝利に伴う国内産業の保護関税や、金本位制の採択が成長を後押しした¹⁷。このような商工業の発達の人々の生活を変化させ、鉄道交通網と電信網の整備によって人や物資の集約点としての都市部が発達することになる。従来やさやかな独立自営農民を理想とするアメリカの農本主義は、19 世紀末において都市部での大規模な産業主義へと構造が質的に転換していくのである¹⁸。

この時期の「金メッキ」的な輝きを象徴するのが、事業で成功した百万長者たちであった。鉄鋼王アンドルー・カーネギーや石油王ジョン・ロックフェラー、そして鉄道王コーネリアス・ヴァンダービルド、金融王ジョン・モルガンらは市場の独占体制を構築することにより巨万の富を築きあげた。「燃やす

ほどの金がある」¹⁹ともいわれた彼らは、およそニューヨーク市の5番街東50丁目以北——それは、およそ今日のロックフェラー・センター以北である——、すなわち、例外なくアップパー・イースト・サイド地区に居を構え、ヨーロッパの王侯貴族の館を模した「宮殿のような邸宅を建造し、大勢の召使いを雇い、王侯のように贅沢な生活をし〔中略〕まばゆいばかりの悦楽の世界」を謳歌した²⁰。

一方、かかる「金メッキ」の表面下では、その急激な工業化と都市化が深刻な社会問題を生み出していた。アメリカ史学者の中野耕太郎によれば、アメリカは「1890年代中葉までに機能不全に陥り、一定期間の混乱期」²¹を迎えるが、それは粗野のままに進歩した個人主義を淵源とする問題であり、具体的には巨大企業における市場独占、都市部の移民労働者をめぐる劣悪な環境、そして都市部の移民たちを困る民主党による〈ボス政治〉による民主主義の歪みとして現れた²²。巨大企業の市場独占の問題は、政府における経済的自由放任主義が直接の原因だが、それを後押しした背景には強者の適者生存を科学的に支持する〈社会的ダーウィン主義〉の思潮とともに、そのさらなる淵源には「個人が自己の権利を追及することを通じて社会が繁栄する」というアダム・スミスのな「古典的な予定調和」に基づく〈ジェファーソン・デモクラシー〉への楽観的な信奉があった²³。しかしながら、かつて自由の可能性と同義にして社会問題の先送りの場であった西部フロンティアに担保されていた19世紀前半の豊かな農村でこそ照応するこの理念も、「フロンティア消失」後の狭隘なる大都市での20世紀的な産業主義にあつては、それが基軸とする共同体を阻害する深刻な社会問題を引き起こすことになる²⁴。

当時、都市の商工業の労働力を担ったのは、1880年代以降、おもに東欧や南欧から合衆国へやってきた膨大なる〈新移民〉たちであった²⁵。都市部での〈新移民〉たちの存在は、上述の「19世紀アメリカニズム」に基づく国民意識を破壊するものとして当時のアメリカでは脅威であった²⁶。なぜなら、それ以前の移民たちのWASPに特徴づけられる北欧や西欧からの〈旧移民〉たちの場合は、民族的・宗教的背景と英語の使用において同質性があり、「ピューリタンの勤労論理」を共有しえたのに対して、〈新移民〉は多様な人種にしてそれぞれ個別の〈文化〉を持つとともに、英語に馴染まぬ言葉の壁がアメリカ的共同体を破壊すると見られたためである²⁷。

東欧ユダヤ系を初めとする〈新移民〉は自国語と自らの文化を維持しながら「それぞれの民族毎に集団を作って生活しており、アメリカの中でいくつもの小世界を形成」したために、「アメリカ社会に根を下ろして、その一員であることを意識するまでには時間が必要」と思えた²⁸。しかもその人口は膨大であり、〈新移民〉の第1、2世代の都市人口に占める割合は、1900年において、「ニューヨークの人口の80パーセント」、シカゴでは87パーセントに及んだという²⁹。さらに、ニューヨーク市のロウワー・

イーストサイド地区に典型的だが、彼らは狭く不潔な中で大勢が暮らす〈テネメント〉という劣悪な3・4階建て賃貸集合住宅に住んでいた。各階毎に約3世帯が居住したが、トイレは各階に1箇所であり、それは常に悪臭が漂い、さらに住居の夏の暑さと湿度は不快を極めた。彼／彼女らのほとんどが縫製工場で勤務したが、その労働時間外にも未完の製品を仕上げるべく、さらに住居での長時間低賃金労働を強いられていた³⁰。したがって、その過酷な労働環境とともに、貧困による治安や衛生面での社会問題が懸念された³¹。20世紀初頭の〈新移民〉たちのニューヨークの状況をみたジャーナリストのジェイコブ・リースは「『このアメリカの主要な都市に、明確にアメリカ人のコミュニティ』といえるものは見当たらない」とさえ述べたが³²、多くの知識人の間では、こうした状況のなかで、「アメリカは崩壊してしまうのではないかとの不安」が広がっていたのである³³。

政治的側面においてもまた、都市部の〈新移民〉をめぐる健全な民主主義が脅かされていた。〈マシーン〉と呼ばれる民主党のアイランド系移民が支配する集票政治組織は、新天地に到着したばかりの困惑する〈新移民〉たちに目をつけた。住居の紹介、就職の世話、市民権及び営業許可証の獲得の便宜、そして、ときに彼らが法に触れた際の処置に至るまで、さまざまな生活に関わる恩を最初に売っておくことで、後に彼らが市民権を得た際に票田にせんとする戦略である³⁴。〈マシーン〉をめぐるこのような仕組みを〈ボス政治〉といい、アメリカが前提とすべき民主主義を阻害する「腐敗」した政治機構として、後の〈革新主義〉時代では主要な論点として問題視されることになる³⁵。このように、かつての「19世紀アメリカニズム」、あるいは〈ジェファーソン・デモクラシー〉に基づく上述の「アメリカの理念」が、産業構造の質的变化や欧州の政情に伴い、20世紀転換期において未曾有の危機に晒されるのである。

3-2. 社会秩序の形成：20世紀転換期の〈革新主義〉

「1901年から17年までの時期はアメリカ史では革新主義の時代」と呼ばれる³⁶。アメリカの〈革新主義〉(progressivism)は、20世紀転換期における急激な工業化と都市化にともなう多様な社会問